

Topics

サシバエについて ～発生状況を見極めた薬剤散布で根絶～

夏から秋にかけて、本来牛が横臥する時間^{おうが}に多くの牛が立ち上がり、牛舎の隅に牛が集まって絶えず尾を動かしている風景をよく見かける。原因は“サシバエ”。サシバエの発生は短期間であるため、対策が取られないことが多い。しかし、牛に与えるダメージは大きく、長期的に繁殖成績、乳質、あるいは肉質が低下することを考慮すると経済的損失は計り知れない。そこでサシバエ対策を紹介する。

●はじめに

サシバエはイエバエと異なり吸血を目的に牛を刺す。刺されると強い痛みと痒みが引き起こされるため、牛は回避行動を取るようになる。そのため、牛舎周辺で大量発生したサシバエから刺されまいと移動する結果、牛は1カ所に集まりがちになる。すると、同じ場所に固まることによってヒートストレスや、横臥時間の減少、採食量の低下、搾乳時にミルカーを蹴落とすことによる乳房炎の増加、さらに血液を介した牛白血病ウイルスの媒介などが発生することとなり、サシバエによる経済的損失は甚大なものになってしまう。

●サシバエのライフサイクルにあった駆除方法が重要

サシバエのライフサイクルは吸血活動をする成虫期間(3～11月)と、越冬する蛹期間(12～2月)がある。駆除方法は成虫期間と蛹期間とでは異なる。駆除のポイントは、「蛹をいかに見つけて排除するか」と「成虫が発生した場合、牛に寄せつけない」ことである(図1)。

●成虫の発生を阻止することが重要

蛹のう化は、気温の上昇によって始まる。気温が18℃を超えると発生し始め、気温の上昇とともに、

卵→幼虫→蛹→成虫のサイクルが早くなる。本格的に成虫が飛び始めるまでが勝負になる(表1)。

●サシバエの産卵箇所

サシバエは、新鮮な糞の上や、少し湿ったオガ粉への産卵を好む。水気の多い場所や硬くしまった地面、踏み固められた糞の上には産卵できない。適度に水分を含み、

表1. サイクル時間

温度	卵→う化	1サイクルの日数
18℃	33時間	1カ月
25℃	14時間	2～3週間
35℃	8時間	1週間

図1. サシバエのライフサイクル

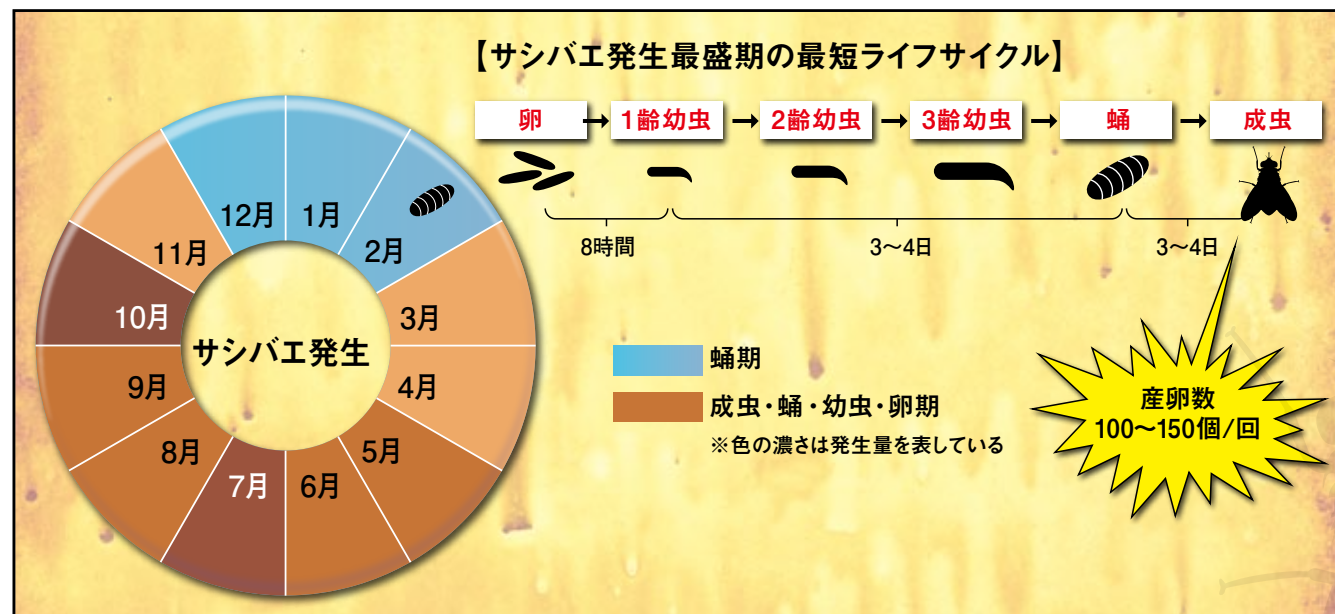


写真1. 乳牛舎外側の隅に溜まったオガ粉

サシバエにとって栄養源となる糞が混ざったオガ粉に産卵する。牛舎の隅や人が頻繁に触らないような場所であれば、薄く積もったオガ粉にも産卵する(写真1、2)。

このため、牛舎の隅のオガ粉やホコリ、残餌をきれいに取り除き、乾燥させる必要がある。

(1) 幼虫対策

飛び回らない幼虫の段階で、いかに数を減らすかがポイントである。昆虫発育抑制剤(IGR剤※)を産卵箇所に浸透するまで散布する。

(2) 成虫対策

幼虫駆除とともに行うことで、効率がアップする。置き型の誘引殺虫剤や耳標型の忌避剤、殺虫剤散布などの方法がある。



写真2. 乳牛舎内側、隅の部分

●駆除の流れ

外気温が18℃に達するまでに、蛹の駆除を行う。具体的には、サシバエの産卵場所となる牛舎の隅のオガ粉やホコリ、残餌を徹底的に取り除き乾燥させる。その後、成虫が見られるようになったら、IGR剤(シロマジンもしくはネポレックス)を、牛舎の隅や鉄柵の下など糞尿が頻繁に動かない場所を重点的に散布する。IGR剤をより効果的に使用するために、卵を発見した1～2日後に薬剤散布を行うのが好ましい。1齢幼虫と2齢幼虫は最も活発に採食活動を行うため、IGR剤が体内に取り込まれやすい。

乳牛の場合、IGR剤は殺虫成分が乳中に移行する可能性があるため、必ず用法用量を守って使用する。金鳥ETB乳剤は、牛体に直接散布でき休薬期間はない(表2)。

表2. 主な製品

ステージ	品名	剤型等	成分名	使用箇所	使用方法
幼虫	シロマジン 2%粒	顆粒剤	シロマジン	牛舎及びその周辺	顆粒のまま or 水に溶かして散布
	シロマジン 10%液	液剤	シロマジン	牛舎及びその周辺	希釈して噴霧
	ネポレックス	顆粒剤	シロマジン	牛舎	顆粒のまま or 水に溶かして散布
成虫	動物用金鳥 ETB 乳剤	液剤	ベルメトリン	牛体	希釈して噴霧(忌避剤として使用)

お問い合わせ先: 株式会社科学飼料研究所

動薬部 TEL: 027-347-3223 / 札幌事業所 TEL: 011-214-3656 / 東北事業所 TEL: 019-637-6050 / 関東事業所 TEL: 027-346-9091
北九州事業所 TEL: 096-294-8322 / 南九州事業所 TEL: 099-482-3044

※IGR剤とは

昆虫の変態や脱皮をコントロールするホルモンバランスを狂わせ、脱皮やう化を阻害することで死に至らせる薬剤。シロマジン系とピリプロキシフェン系の2種類がある。

シロマジン系 IGR 剤(商品名: シロマジン、ネポレックス)の使用のポイントは確実に幼虫の体内に薬剤を投与することである。採食行動を行う幼虫期に生息場所に散布し、糞

などの栄養を体内に取り込むと同時に薬剤を侵入させる必要がある。

ピリプロキシフェン系 IGR 剤(商品名: ラモス SG)は接触で効果があるため、卵や蛹の状態でも効果が得られる。

IGR剤における作用の違い

シロマジン系(シロマジン・ネポレックス): 蛹化を妨げるため、幼虫(ウジ)のまま死に至る。成虫期間に月1～2回の散布が有効。

ピリプロキシフェン系(ラモス SG): 脱皮を阻害するため蛹にならず、幼虫のまま死に至る。活動終盤時期の散布が効果的。

注意

同じ薬剤を使い続けると耐性がつき、薬剤散布の効果が薄まることもあるため、発生状況を見ながら、薬剤の使い分けを行う必要がある。